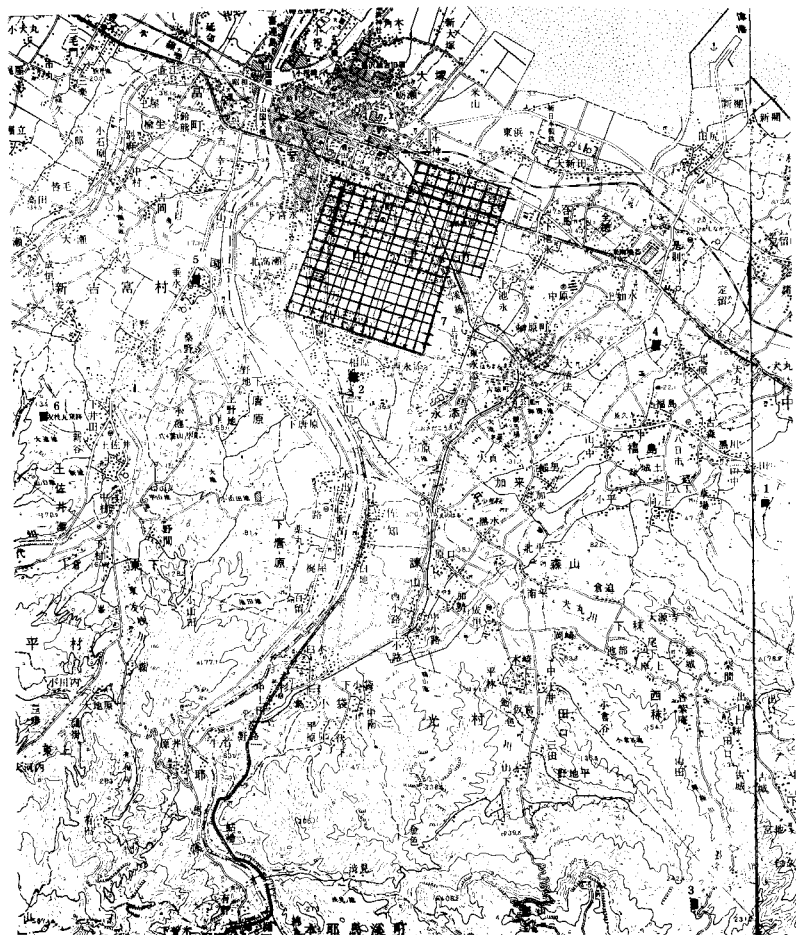


考古学よりみた古代の中津平野

— 須恵瓦と百済寺，長谷寺銅造観音立像の背景 —

賀川 光 夫



1. 伊藤田瓦窯跡
2. 百済寺（相原寺）
3. 長谷寺
4. 旧百済寺跡推定地
5. 垂水廃寺
6. 友枝瓦窯跡
7. 条里

第 1 図 中津平野と古代主要遺跡

はじめに

中津平野は、山国川の沖積によるもので、周防灘に面した豊前一带の中心の邑である。この沖積平野が形成されると、その広大な低湿原に条里が設定される。おそらく大化の改田によるものであろうが、それが施行された時期は明かでない。条里は、宇佐平野のものと同じであるところから、この二つは同じ時期のものと推理される。豊前平野の各地に存在する奈良以前の寺跡などの調査から、その方位考察などを推理して、この条里が、宇佐弥勒寺建立が初まる天平10年頃までの8世紀前半にあてることが妥当であると考え、この条里制定と灌漑事業とは、おそらく多数の埴化技術者の手で実施されたものと推定される。すでに中津平野の南部一带には6世紀以来、須恵器の窯場が多数建設さ

れ、窯業が盛におこなわれていた。6世紀末には、その窯業の中から瓦陶兼業によって須恵瓦が製造されていた。この瓦陶兼業の窯跡から発見された瓦は、その窯の構造と併せて、もっとも古式のものとして推定することができる。この瓦の用途を追求することができれば、およそ日本でもっとも古式寺院の発見につながろう。その追求の糸を相原の百済寺跡に焦点をあててみると、帰化技術者の活躍と、彼等の崇仏心による造瓦、造寺、造仏などの諸問題に一つの検討を要すべき点に気付く。この小論考は、そのような重要な課題を豊前中津平野に求めておおかたの批判をいただきたいと考えるのである。

I 仏教公伝後の伽藍建設 ——伊藤田瓦窯址と百済寺——

日本への仏教公伝についての日本書紀

「欽明十三年壬申、冬十月百済聖明王^{更名聖王}遣_三西部姫氏達卒怒唎斯致契等_一、獻_三釈迦仏金銅像一軀・幡蓋若干・經論若干卷_一。」

右の記事については、継体天皇崩後の政治情勢をめぐっての混乱が、仏教公伝の問題にも及び、近頃右の日本書記欽明天皇13年公伝説が孤立して宣化天皇3年戊午（上宮聖徳法王帝記では欽明治世）に仏教の公伝をみたとする考えが一般の注目をあびている。この宣化天皇3年戊午（538）は、百済では聖王が扶余に遷都した年にあたり、百済仏教が本格的に発達しようとした時で、内外事情からみて妥当性が強い。

宣化天皇3年公伝説には、資料としての推古4年飛鳥寺塔露盤銘や、新羅僧審祥の「審祥大徳記」などがあり、後者は8世紀の記録ではあるが、宣化天皇3年を明記している。

日本に仏教を導入した百済は聖王、威徳王などの時期に仏教は隆盛をたどり、その裏付けとして最近扶余附近では数多くの寺院址などが発見されているようである。そのうちの一つが、扶余の一角にある軍守里廃寺である。この廃寺址は、金銅菩薩像の出土と、その像造をめぐり、創立期に論争があった。又伽藍の配置が、中門、塔、金堂、講堂と一線上の配置になり、日本では四天王寺式伽藍の様式に相当するといわれて興味をひく。この寺が金銅菩薩像の出土と伽藍様式などによって6世紀と思考せられ時期的に、わが宣化朝にあてることもできるようである。

仏教公伝来後、わが国において寺の創設は、

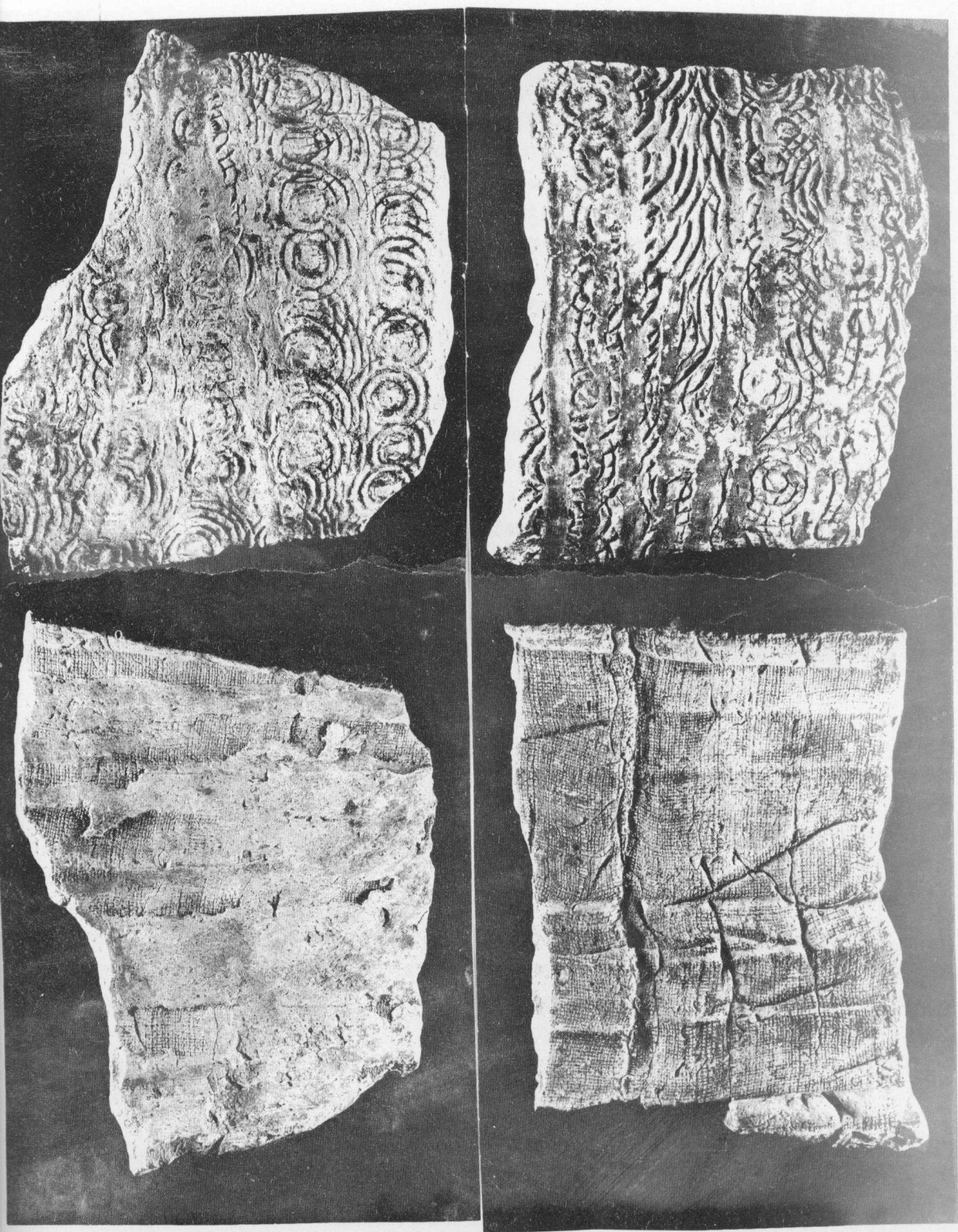
「大臣妄用_三妻計_一、而殺_三大連_一矣。平_レ乱之後、於_三摂津国_一、造_三四天王寺_一。」—（用明二年七月）

書紀の記録につづいて推古天皇4年冬10月

「法興寺造意、則以_三大臣男善徳臣_一 拜_三寺司_一。是日、慧慈・慧聰二僧、始住_三於法興寺_一」

とあるので、宣化天皇3年を公伝とみてその後半世紀後に集中的に伽藍の建立がおこなわれている。この間崇峻天皇元年にみる法興寺建立にあたって百済より各種工人を集めて技術的体制を整備しなければならなかった様子がうかがわれる。

上記の如く七堂伽藍が完成したのは、四天王寺について法興寺である。法興寺堂舎の建設には、寺工、鑪盤博士、瓦博士等多くの技術者が導入されているが、この技術がこれ以降7世紀にわたって全国の各寺建設の普及に大きく貢献することになる。7世紀にはいと造寺の機運が各地に起こり、それにともない造瓦の技術が一般に普及するようになった。造瓦の技術が一般的になると言っても百済や新羅の工人の手によってできたものが多く、今日九州各地で発見される8世紀以前の瓦は、渡来の工人集団の技術によって作られたものと推理することができる。特に注目されることは、四天王寺や、法興寺が完成した6世紀後半から7世紀初頭にかけては、北部九州において造瓦の技術が著しく発達



第2図 伊藤瓦窯跡出土 須恵古瓦（共伴須恵器より6世紀と判断）

し、須恵質の古瓦が多量に生産されていたことが明らかにされ、注目されているのである。

(1) 伊藤田瓦窯址の背景

法興寺建設に渡来した百済の瓦博士 麻奈文奴、陽貴文、悽貴文、昔麻帝弥などによる造瓦の資料は、1956、57年奈良文化財研究所によって発掘された。発見された古瓦の多くは、須恵瓦というよりは可成り発達した技術によるものであった。おそらく馬子によって招聘された瓦博士は、百済において專業として高度の造瓦技術をもった人達であって、この技術は広く7世紀初頭から、畿内一円に普及して行ったものと考えられることができる。こうした中央貴族に寄生した技術者の集団の中にはやがて中央政府の主要な地位を得て古代国家の権勢をものにした者も多い。中央貴族がそうであったように地方貴族の間でも、大陸半島の文物に注目して、多くの技術者の導入をはかったものも数多い。特に一衣帯水、半島と九州の間では、彼我の交流は著しく、技術者、文物の往来は畿内にまして多くおこなわれたとみるべきであろう。その一つの例題を挙げてみよう。

中津市伊藤田踊ヶ迫の須恵の瓦窯跡は、1957年夏、筆者などの発掘によるものであったが、須恵器と瓦が相伴して出土し、その原始的登り窯の形式は後の瓦窯跡の祖形形態であって、本邦古瓦窯跡の研究上もっとも注目すべきものであった。しかも、この窯跡出土の相伴須恵器が6世紀中葉から終末の時期に編年されることから、出土瓦の年代を推定することができた。古瓦のすべては須恵質のものばかりで、表裏に青海波、布目がみられ、左右が折れたように切断されているところから、その技法が「桶巻き法」によることも確かである。

須恵の古瓦には軒先瓦がみられず、専ら平瓦に終始していることもその古式造瓦法ということが出来る。造瓦の技術の発達を検討するもう一つの方法としては、スサ混りの窯壁や、床に段を設けず、緩傾斜面に河石を止め石として並べるといった簡素な窯の構造からも考えられる。

須恵器の編年の上で、6世紀後半の土器が出土したことによって、相伴の須恵瓦が、6世紀後半の時期に使用されたことになる。四天王寺や、法興寺が6世紀末から7世紀初頭に相継いで出現したとしても、その造瓦の技術は高度で、伊藤田踊ヶ迫の瓦窯跡に比して技術的に時差があることは事実といえる。もし、現在の考古学上、須恵器の編年が、年代的絶対性の確立においておこなわれているのであれば、間違いなく畿内における造瓦の時代を越えて6世紀後半の時期を伊藤田踊ヶ迫の窯跡にあてることができよう。更にこの踊ヶ迫窯跡出土の須恵瓦の供給が寺であるとすれば、畿内地方における七堂伽藍創立に先んじて一寺を考えねばなるまい。6世紀後半の寺の出現は、九州と朝鮮半島、特に百済との関係を舞台に考えなければならぬ。畿内と同じように九州各地の貴族間と半島南部の王族貴族間の交渉が意外に深い関係にあったといえる。最近福岡県太宰府周辺においても6世紀末7世紀初頭の瓦窯跡が発見され、伊藤田踊ヶ迫と同様須恵器相伴で、須恵質の瓦を出土している。こうした考古学上の問題は、当然の如く、半島との直接の関係を考える資料となる。造瓦の技術に関する限り、畿内に先んじて行われ、これが寺に供給されたと考える限り寺の出現も九州で考えねばならぬであろう。日本書紀による仏教公伝が宣化天皇3年又は欽明13年のいずれか、こうした論議はあくまでも畿内国家においてのものであって、仏教と寺の出現については、九州の氏族間の問題と無関係である。九州各地における6世紀古墳と、原始仏教の関係は今日迄中央学会の研究対象とはならなかった。このことに関して、考古学の新しい問題出現は古代史研究の重要な課題提起となる。しかしこのような重要な問題を瓦窯跡の出現の問題だけで提起することはできぬ。更に新たな事実をあげねばなるまい。

(2) 百濟寺創立の問題

百濟寺(相原廃寺)とよぶ寺跡が考古学的研究の問題となったのは1945年以降のことである。中津市相原にある寺跡は、伊藤田踊ヶ迫より直線で約2軒北の平地にあり、百濟寺という不滅の名の如く、単弁軒丸瓦と一孤線を配した軒平瓦が組で出土し、百濟式古瓦によって特徴づけられている。この古瓦に関する限り7世紀後半の瓦と推理され、山国川北岸、福岡県太平村友枝瓦窯跡発見の古瓦に類似したものが存在する。豊前南吉富の垂水廃寺などととも友枝瓦窯よりの供給がおこなわれたものと推察される。百濟廢寺の伽藍配置は、東に金堂、西に塔を配置する法隆寺様式と推理され、塔はすでに地下げされて、そこから発見されている心礎が中津市相原、百濟寺跡に最寄りの瑞福寺に移存している。塔心礎の位置から西側に、金堂跡と推定される版築の土段が一部残され、この土段の築積に非常な興味をおぼえた。こうした大陸の版築に類似する遺構の一部に、礎石二個の残存している。2個の礎石は6.2尺(1.85米)の間隔でそれが高麗尺をもつとして配置されたことが明かである。

心礎の推定位置や版築土段などから、法隆寺式系の寺と考えることができるが、問題は、この版築土段の一部から須恵の瓦が小片を合せて2個ほど発見された。この土段の築積に須恵瓦がまぎってつき固められたものと考えより方法はない。須恵の古瓦は、中津市伊藤田踊ヶ迫瓦窯跡より発見された古瓦と全く同じものであると考えられるが、この寺に伊藤田の瓦窯で作られた瓦を直接使用したとは思われぬから、当然この近くに須恵瓦を使用した寺が存在したと思われる。こうなると百濟寺(相原廃寺)の名称がどうも気になるのである。法隆寺の再建、非再建の論議が若草伽藍の発掘ではぼ落着いたのと同様、或は、一部現存する百濟寺の廃寺跡が、百濟寺の再興(7世紀後半)の寺であって、創建の寺がこの近くに存在するのではなからうかという推理も成り立つのである。伊藤田踊ヶ迫の瓦窯は、ゆうに一寺建立のために供給する程の量を製造することは可能であるはずである。

百濟寺(相原廃寺)の創建と再興という假定をもって伊藤田踊ヶ迫の須恵の瓦窯跡との関係を考えてみると、創建は6世紀後半で須恵瓦を使用、再興は7世紀後半で友枝瓦窯の百濟系古瓦を使用したとすれば、現在一部存在する金堂版築の中から出土した須恵瓦と、土段周辺から大量出土する百濟系瓦との双方の関係から推理は可能となる。問題は創建時の寺が何処にあったかという問題と、創建時と再興時の百濟寺の背景が問題となる。

百濟寺なる名称の寺が初めに伊藤田の瓦窯を使用して何処に作られたかという問題はその選定にあたって2ヶ所があげられる。その1つは、伊藤田の東、5軒の中津市北原一帯の果樹園造成の際発見された須恵の古瓦である。この地に一寺を設けたとすれば地形的には合点がゆく。もう一つは百濟廢寺跡の近くに一寺が存在したとする推理であるが、廃寺跡の東北の水田中に長方形の土段がほとんど変形せずに残されていることに強い興味をおぼえるのである。この長方形の土段が寺のために作られたとすれば、この土段の上に一例に伽藍が並ぶことも考えられ、その面積(800平方メートル)もまさに適当である。この長方形土段が寺跡だとすれば、若草廢寺と法隆寺との関係に近く、百濟寺の創建と再興を抵抗なく考えることができる。再興の金堂の版築にさいして、創建瓦が混在することは大いにあり得ることであるから、この疑問は当然であると考えてよい。

次に、創建瓦と再興瓦の供給を案示する伊藤田瓦窯跡と友枝瓦窯跡の問題であるが、前者は専ら須恵瓦と須恵器を同時に製作し、これを同時供給したものとみられる。そして窯は原始的登窯であるから長期の使用は不可能と考えられる。これに対して友枝瓦窯跡は、古瓦の專業窯で、構造も大きく素晴らしい。この瓦を専用して専門に造瓦を行い長期間の供給にたえるものと思われるので、伊藤田の場合とは問題にならぬほど広く長い供給を考えることができる。この事実は、造瓦の技術発達の中で



第3図 百濟寺金堂跡版築（上）と塔心礎—瑞福寺に移存（下）

あると同時に6世紀後半から7世紀後半に至る1世紀間にわたる朝鮮半島南部の政治的事情を反映したわが国の状態であるとみてよい。

(3) 朝鮮半島技術者の渡来と活躍

6世紀後半といえば、四天王寺や、法興寺が日本書紀にその造立の記述をみる時期であって、それよりわずか前の538年は百濟聖王が扶余に遷都し、この時期に軍守里に寺を創立したものと考えられる。この時期は、朝鮮南部においてもようやく伽藍が仏教の興隆とともに作られて、なお、時期浅い頃と推定されるので6世紀後半にそう多くの造寺に関する技術者がわが国に渡来したとは考えられぬ。6世紀後半とはそうした時期であると思われるので、中津市百濟寺は初期の技術者集団が移住し、彼等の故国での宗教的目的のために窯を設け一寺を創建したとも考えられる。したがって、朝鮮半島からの技術者の移住はこの時期に多数おこなわれたものと推理されるので、彼地での崇仏思想は当然西南日本各地に伝えられたとみるべきである。かりに百濟寺という名称の寺が6世紀に須恵の瓦を使用して創立したとすれば、それが半島の崇仏思想によって朝鮮半島の人達の手で作られたとしてもこの寺をもって日本最古の寺ということになる。それが畿内という古代国家成立の中心から遠く離れた九州の一角であるだけに百濟寺と伊藤田瓦窯跡の問題は興味深い。

百濟寺という名の寺の創建時の背景が、以上の如くであるとして、再興の寺に技術者固着、專業の瓦窯から供給を受けて堂舎を作ったことは、明かに背後社会の問題を考える上で重要である。7世紀後半は、北部九州では朝鮮式山城が盛んに作られた時期でもある。新羅の台頭によって百濟と日本の連合は崩壊し、まともに政治的脅威を受けた時期として水城の築堤もおこなわれた。大野城跡や基城跡の軍倉から多量の米が発見されたことなどは、その切実な事態を物語るものと推理せざるを得ない。この時期における百濟の技術者達の活躍は大きく、北部九州一帯に山城が次々に造築されたものとする。半島の技術者が日本において進んで日本の貴族の配下で優遇されながら技術を駆使したのはこの7世紀後半の時期であったといえる。こうした緊張の時に中央集権が促進され律令への道が開けたといえる。律令制度の大綱は中央帝都の莊嚴と寺の建設であると極言されようが、この時に技術者專業の制度もおこなわれ、瓦の供給の増加とともに広大な窯の出現がみられるものと思われる。友枝瓦窯から垂水廃寺や再興の百濟寺に共通な瓦が発見されることは、窯の構造の立派なことと相まって供給の広さを物語る7世紀後半の社会事情といえる。ちなみに半島技術者の数を調査してみると、周防国と豊前国に多く集中していることをもってしても、百濟寺創立とその後の事情を推察することができる。

II 長谷寺の銅像観音立像の背景

(1) 銅造観音立像の銘文の解説

中津市の南、三光村大字西秣は、八面山を背にした小村であるが、その東麓に長谷の部落がある。この部落の奥詰め近くに長谷寺があるが、寺は本堂と奥ノ院からなり、山岳寺院の構造をなしている。大宰管内志、豊前之七、下毛郡に大久山窟(神龜4年)を作り、仁聞大士十一面大悲像を安ず、とある。また長谷寺は真言宗にして高野山の末寺という。

さて問題の長谷寺銅製観音菩薩立像は、何時頃この寺に安造されたか不明であるが、その功德をしたい近郷の信仰をあつめている。銅造観音菩薩は、かつて香取秀真氏の調査によって、ほぼその実態を知ることができた。香取氏は、本像の下框に横並びに陰刻された造像銘を解読され、本像が火中の

痕跡をみるとして、銘文はその時一部解説不能となったとしている。香取氏の解説は下記の如くである。

壬歳次攝提格林鐘拾五日周防凡直百背之~~囹~~背~~囹~~為命過依誓願觀世音菩薩作~~囹~~

と読み、「壬歳次攝提格」は干支の解説から皇極天皇の「壬寅」年にあて、その元年とすることを記している。これに対して「大分県の文化財」は、その後

壬歳次攝提格林鐘拾五日周防凡直□有之□□□□為命過依誓願觀世音菩薩作奏

として、香取氏の解説とやや違った見解をなしている。「百背之姥汝背~~囹~~」を「□有之□□□□」としてふせ、最後を「作~~囹~~」「作奏」とした。また、「林鐘拾五日」の五を「伍」としていることなど細部に違った読をしている。

次に久野健氏は、「美術研究」298(1975)で、

壬歳次攝提格林鐘拾五日周防凡直百背之女汝背兒為命過依誓願觀世音菩薩作奉

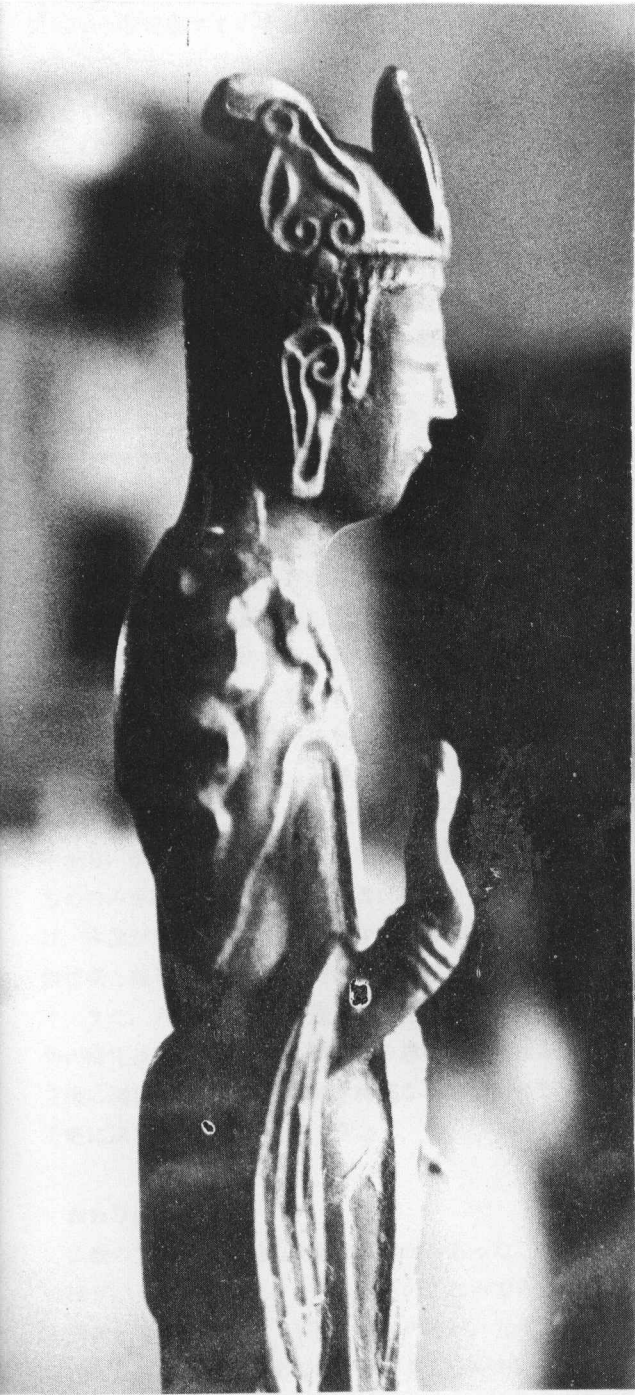
として、これには福山敏夫氏の意見を参考とした。としている。この解説によれば、十行目の「五」には人偏があるらしくみえ、また二十行目の「汝」には三水ではないらしいとしている。そして十六行目からの問題のところは「百背之女汝背兒」とし、最後は香取氏の「作奉」と読んでいる。

本銘文は、解説に難解な部分が香取氏の指摘の如く火中であってとけたためか多々あり、各様に解釈できるものと推理される。しかし、造像銘の「壬歳次攝提格林鐘拾五日」は、攝提格が寅の歳を意味(大歳星が寅の方位にあること)することから壬寅をあてることになる。また林鐘は音律で六月をあてることができるので、「壬寅年六月十五日」とすることが妥当で、この年は、皇極天皇元年(642)にあたり、干支一運を下げると文武天皇の大宝二年(702)にあたる。長谷寺の銅造観音菩薩が、飛鳥、白鳳のいずれかの作品であることは、この像の下框にある銘文でわかることになるが、その造像にあたってこの「壬寅」の年を皇極、文武いずれにあてるか、ここに一つの問題があるといえる。

(2) 銅造観音立像の背景

長谷寺観音像の背景については、いささか不明な点ばかりで、何時頃から、この寺に伝えられたかもわからない。しかし、久野健氏は、可能な限り、この問題を追求して興味深い考察をなしている。すなわち「周國凡直」は太田亮氏の「姓氏家系大辞典」をかりて凡河内氏の族、周防國道家の氏姓とし、氏人は宝龜十年「周防國周防郡人外從五位上周防凡直葦原の賤男公、自ら他戸皇子と称して百姓を誑惑す」など、その他「東宝記」や「延喜年間、玖珂郷戸籍」などから、周防凡直は、古代周防の豪族と推理されるとしている。更に観音像の銘文にみえる「百背之女汝背兒」は、一族の中に周防凡直百背という人物があって、その女に汝背兒という名の人がいたことになる。その汝背兒が逝去したために願をこめて観音立像を建立したということになる。久野氏の銘文解説と、その造像の背景であるが、ここまで史料を追求することができるので、本像の造像についてはよく理解されたことになった。

本像は周防國豪族凡直百背の女の逝去による誓願として、それら人物の活躍、や、この事件に関する年代が「壬寅」の年という銘文から推理されなければならぬ。香取秀真氏は皇極天皇元年(642)に本像の成立を考えられているが、もとより「壬寅」という年号をそのままあてて皇極天皇元年としたのではなく、飛鳥美術の彫刻からする美術的考察をも加えたものと思われる。しかし、当時であっては飛鳥、白鳳両期の美術的詮索に今日ほど精細な検討がおこなわれていないこともあって、久野健氏は、新たに干支一運を下げた文武天皇二年(702)説をもって本像の造立時と考えられている。久野健氏の意見は、下記の如くである。



第4図 長谷寺観音立像（銅像）一壬寅歳在銘

「この観音像のやや腰をひねって立つ姿や、裳のおり返りの部分に、さらに反転した衣文を表現している点、三面宝冠の制から、裳の上の瓔珞を別鑄してとりつけていたらしい技法に至るまで、とうてい七世紀前半までは遡り得ないだけでなく、白鳳時代も末に近い頃の制作らしいことを物語っている。つまり、私は、香取説から干支一運を下げた文武天皇の大宝二年(702)の壬寅の年とするのがよいのではないかと考えているのである。」

この久野氏の年代に関する見解は、久野氏自身が追求した周防國凡直百背たる人物についての考証の中で、銘文の「為命過」についても年代の裏付けをなしているように思える。久野氏の引用は齊明天皇四年(658)と推理される観心寺の光背裏面鑄銘の

戊午年十二月為命過治伊之沙古(下略)

また「法隆寺記補志集」の綱封蔵の幡銘をひいて

□□□十七日為□□□命過之、是以願□、幡があり、白鳳時代の造像記の例とするところも充分に考慮に入れたものと推理される。おそらく久野健氏の銘文考察と、美術的推理が、この問題(造像時)を決定する重要な決定になると考える。もし本像が造像後問もなく、長谷寺に奉納されたとしたら、宇佐虚空寺出土の埴仏や、同天福寺奥ノ院発見の塑像などととも七世紀後半から八世紀初頭の興味深い一連の仏像彫刻となる。

さて、本像は、大分市杵原八幡宮の銅造如来像との対比が注目される。類似点として、台座反花が、両者ともに胡桃形に近い点があげられるが、長谷寺はやや裾が開いて請花に続き正確な対比とはならない。しかし反花の形態から、およそ両者の類似点は指摘される。杵原の如来立像と長谷寺の観音立像では、両者の造像の視点が各部で異なるために、細部の対象を比較することは困難であるが、久野氏も指摘しているように唇にわずかに微笑を浮かべ、胸身は比較的くびれ、腰がふくらみ、柳楊がでてきている点など飛鳥系統をひくものと考えられる。また久野氏の造像銘の追求の中で「為命過」の引用に齊明天皇四年は、西暦658年で、皇極天皇元年の642年とわずかに12年の差となる。銘文の解釈からすれば、この差は造像にとって問題とはならぬと考えられる。もし、造像の各種特徴の中から、飛鳥の特色のみを取り出し、更に、銘文の中から、それを追求する資料に7世紀中葉とするもののみを取りだして、香取秀真氏のいう「壬寅」の年を皇極天皇元年にあてることができるのであれば、本像が意味する背景にまた変わったものがでてくることになる。その一つの可能性は、香春山の採銅技術と続日本紀にみえる周防の銅鋳などに関する記事の精細な詮索が必要になってくることになろう。また、六世紀後半から豊前に展開した造瓦の技術や、造寺の問題とも間接に作用して、豊前、周防の埴化技術者の問題にも重要な一思索が生まれることになるであろう。したがって、長谷寺の観音立像に関して、久野健氏の如き精細な考察が別の形でおこなわれるとすれば、そのような一連の問題を更に深く追求することができよう。

おわりに

仏教の公伝についての問題は古くからあった。そして最近、造瓦や造寺の問題も一段と古くさかのぼり、それを余期することは目下のところできぬようである。豊前伊藤田瓦窯跡の発掘と、百済寺の調査から、6世紀末、7世紀初頭の寺が、九州で存在可能となった今日、公伝とは別に崇仏思想が存在したことを明かにすることができる。一方、造瓦、造寺に活躍した人達は、故國における崇仏思にもとずき造像をも考えたであろうことは当然のことといえる。彼等の活躍舞台は、豊前や周防に集中していたことは資料に徴して明かである。彼等は、その地で村を作り高度な生産力を駆使して、彼

等のために故國の崇仏心によって、造瓦、造寺、造仏をこころみたことは否定できぬ。本小稿は、そのような問題の提起であって、長谷寺の銅造観音菩薩は、やや本流からぬけだしはしたが、中津平野での歴史考古学的資料として、銘文の解説・美術とその背景などに興味深い問題があるので、資料紹介をも兼ねて、私の考えを述べたものである。なお、この小稿の前半は加藤知弘編、「大分の歴史史料」に「仏教公伝と伽藍建設の一問題」として発表した論考に加算して再録したものである。

主要参考文献

日本書紀，卷21, 22,

続日本紀

郡書類従 卷64 伝部 上宮聖徳法本帯説

賀川光夫(1965) 中津市史 初期仏教文化 中津市史編集会

小田富士雄(1970) 野添，大浦窯跡郡，福岡県文化財調査報告書 43集

久野 健(1975) 大分・長谷寺銅造観音立像，美術研究 第298号 美術研究所